実践女子大学図書館蔵『狭衣物語』諸本書誌

上野英子

凡例

一　本稿は実践女子大学図書館所蔵『狭衣物語』諸本の書誌報告である。本稿では、原則として、物語本文が掲載されてある資料二十四点に限って、採り上げることにした。ここで紹介する資料は、現在、常磐松文庫・黒川文庫・山岸文庫の各文庫に所蔵されているが、本稿ではこれらを均し、「写本・新写本の部」「古活字本の部」「版本の部」に分類して掲載した。その際、黒川文庫本と山岸文庫本には、それぞれの文庫の函架番号を付しておいた。

一　『実践女子大学文芸資料研究所電子叢書Ⅰ』〈CD―ROM篇〉所収の資料と重複するものについては、各書誌冒頭の書名の下に、「（＊①）」の如く、識別番号＊および〈CD―ROM篇〉での所収番号（①～⑧）を併記しておいた。但し物語本文を持たない⑨⑩の二点はここでは割愛した。

一　原則として、表紙や題簽・内郭の寸法（表示方法は縦×横、糎）は、第一冊目によった。損傷もしくは剝落等により問題のある場合に限って、第二冊目（それも問題のある場合には更に次の冊）を採用した。また字高と一行字数は序等を除いた本文篇第一丁目表（字数は冒頭行）に、片面行数は同丁裏によった。

一　印記は主立った旧蔵者のものを紹介し、本学図書館で捺されたもの、すなわち「実践女子大学図書館印」（単郭朱長方円印）「常磐松文庫印」（単郭朱長方印）は省略した。また諸本には本学図書館の原簿番号が五桁の漢数字で墨書されているが、これも省略した。

一　整版本で、各種序跋や挿絵等の記載事項が同じ場合には、初出の場合にのみ翻刻ないしは詳細を説明し、以下はその有無や掲載場所等を指摘するにとどめた。

一　奥書・識語等の翻字に際し、朱字は「　」（朱）等の記号を用いた。また参考として序跋本文の異同を示した場合もあるが、その際は該当個所に傍線を引き、続く（　）内に対校本の本文を記した。

書　誌

【写本・新写本の部】

1　常磐松文庫蔵「さころも」（＊①）

黒漆箱入り。上蓋中央に題簽を模して、霞流しに「さころも」と沈金。

写本四冊（物語）。列帖装（各冊六～八括・四孔・朱色糸）。

表紙寸法二三・三×一七・五糎。

紺地金泥紙表紙。左肩に朱色地に金泥彩画書題簽貼付。題簽寸法一四・〇×三・五糎。題字は全冊一筆で「狭衣　一」（第一冊目、以下准之）と外題と巻序を墨書。

見返しには布目地に菊花型押の金箔を貼り、さらに松や菖蒲を彩画する。

本文料紙は金泥下絵付き鳥の子。前遊紙各冊一丁。

巻首題「狭衣巻第一」（第一冊目、以下准之）。片面十行・一行十七字内外。和歌は改行三字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。

全冊一筆。奥書・識語・書き入れ等無し。本文は流布本系。

旧蔵者印記「岡田真之蔵書」（複郭朱長方印、アララギ派歌人岡田真氏）。最豪華美装本。

2　常磐松文庫蔵「さころも」

写本四冊（物語）。袋綴（四孔、後綴白糸）。

表紙寸法二六・三×二〇・五糎。

紺無地紙表紙。中央に朱色（第一冊目）または卵色（第二冊目以降）の無地書題簽を貼付。題簽寸法一五・二×三・五糎。

題字は全冊一筆で「さころも　一」（第一冊目、以下准之）と外題と巻序を墨書。また第一冊目のみ、題簽右に「帛」と

墨書した茶色小紙片を貼付する。
本文料紙楮斐漉き混ぜ。見返し白紙。前遊紙各冊一丁（但し第一冊目は欠丁）。
内題無し。片面十一行・一行二十一字内外。和歌は改行二字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。寄り合い書き。奥書無し。本文は流布本系。
また朱筆による鈎点・句点・濁点ほか、版本傍注の抜粋とみられる注記等がある。
識語、第一冊目前見返しに「戊申七七」（墨筆）「八太／全部／四巻」（朱）。
旧蔵者印記「岡田真之蔵書」（複郭朱長方印）「御巫書蔵」（単郭朱長方印、御巫清勇氏）他。

3　常磐松文庫蔵「さころも」

紐付き木箱入り。上蓋の表中央に「さころも」と墨書し、箱の側面には「47」と記した書票を貼付。
写本四冊（物語）。列帖装（各冊六～九括・四孔・利休鼠色糸）。
表紙寸法二四・〇×一八・一糎。
鼠色地金泥小花散らし空押模様紙表紙。中央に金泥下絵付き朱色題簽貼付。題簽寸法一四・三×三・〇糎。題字は全冊一筆で「さころも　春」（第一冊目、以下准之）と外題と巻序を墨書。
本文料紙鳥の子。見返し白紙。前遊紙各冊一丁。
内題無し。片面十行・一行十八字内外。和歌は改行一字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。
本行は全冊一筆。稀に異文注記があるが、本行と同筆。奥書・識語等無し。流布本系。
旧蔵者印記「濱南」（白文朱正方小型印）「残花書屋」（単郭朱長方円印、ともに戸川残花氏）。「岡田真之蔵書」（複郭朱長

方印)。美装本。

4　常磐松文庫蔵「狭衣」

沈金黒漆箱入り。上蓋の左下端に「さこ(ママ)衣／草し」と墨書した紙票を貼付。

写本四冊(物語)。列帖装(各冊六～九括・四孔・朱糸)。

表紙寸法二三・四×一六・五糎。

紺地金泥紙表紙。中央に、金泥霞み流し白地書題箋貼付。題簽寸法一三・四×二・七糎。題字は全冊一筆で「狭衣　春」(第一冊目、以下准之)と外題と巻序を墨書。

本文料紙鳥の子。布目地模様金箔見返し。前遊紙各冊一丁。

内題無し。片面十行・一行十八字内外。和歌は改行二字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。

全冊一筆。稀に異文表示もあるが本行書写者の筆か。奥書・識語等無し。流布本系。

旧蔵者印記無し。

第一冊目第一丁表に「S36・1・7」と日付の入った一誠堂書店の紙票がはさんである。

5　常磐松文庫蔵中臣祐範奥書本「さころも」(＊②)

紐付き木箱入り。上蓋に「さころも四冊／したひも二冊」と墨書。上蓋側面に「さころも(写)」とペン書きした小紙片を貼付。

写本六冊(物語・下紐)。列帖装(各冊四～六括・四孔・小豆色糸)。

表紙寸法一六・〇×一五・二糎。
物語四冊は紺地金泥紙表紙。下紐二冊は紺無地紙表紙。表紙中央に、紗綾形薄緑色地に金泥霞流しの書題箋を貼付。題簽寸法八・八×二・五糎。題字は全冊一筆で、「さころも　一（〜四）」、「したひも　一二（三四）」と外題と巻序を墨書する。
見返しは、物語四冊は各種型押し金箔を使用（第一冊格子・第二冊菱繋ぎ・第三冊亀甲・第四冊七宝繋ぎ）、下紐二冊は金銀霞流し。
六冊とも、本文料紙は鳥の子で、全冊一筆。
〈物語四冊の場合〉
前遊紙各冊一丁。後遊紙一〜五丁。内題無し。片面十行・一行十五字内外。和歌は改行一字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。本文は流布本系。
〈下紐二冊の場合〉
前遊紙各冊一丁。後遊紙三丁。巻首題「下ひも二」「狭衣第三」「狭衣第四下紐」。片面十行・一行十三字内外。下紐本文にのみ、系図の線や引歌の鉤点等に朱筆が入る。『したひも一』冒頭に、次の〈天正一八年沙彌半醒序〉あり。
此したひもといふさ衣の抄はなからの
橋のあたりよりよろつの物語を
あつめ給へる中にも筆のあやまり
をうつしけるまゝことはりたしかな
らさる所〳〵をしるすへしと有し

かは古本をみるに心も詞もわきかた
くて過行に賀茂の神垣ちかき
普賢堂の僧衆に力を合て
造営の次ねはん経の箱の底に
下ひもと外題にある草子をみる」
に明神のあたへ給へると懐中して
帰りけり抑光源氏物語の心
見解なは此抄にをよふへからす
一条禅閤宗祇なともてあそひ
給はぬにより講釈なとたえたる
へし系図は逍遙院殿あそはし
けりつれ〳〵のまきらはしに御覧あらん
人〳〵猶あやまりをあらためらるへし
天正十八年　初冬に書写の功
をはんぬ　沙彌半醒」

『したひも三四』冊の注釈奥に年月・署名のない、次の〈下紐跋〉あり。

此物語のはても源氏夢の浮橋
の面影也少年と書そめて残

おほくかきとゝめたり四冊を全
部も心あるへしはかりかたし後生
の人しるさるへし

同冊墨付き本文最終丁オに、次の書写奥書あり。

此狭衣抄二冊　臨江斎紹巴
被注之依許可書写之畢
天正二十年三月日　中臣祐範

旧蔵者印記「岡田真之蔵書」（複郭朱長方印）、「芸叢」（白文菱形朱印）「芸叢之印」（単郭朱正方大型印、ともに龍門文庫印）。

6　常磐松文庫蔵寛佐奥書本「さころも」（＊③）

漆塗り木箱入り。上蓋の中央に題字「さころも」と墨書、側面には「さころも／元和四年／連歌師寛佐／書写」と墨書した小紙片を貼付。

写本全六冊（物語・下紐）。袋綴（四孔・茶色糸）。

表紙寸法二四・六×一八・七糎。

紺布目地に金泥彩色紙表紙。中央に金泥下絵付き黄色題簽（第二冊目のみ青色）を貼付、題簽寸法一五・三×三・一糎。

題字は「さころも　一（〜四）」「したひも　上（下）」と外題と巻序を墨書。題字・本文ともに全冊一筆。

見返し白紙。本文料紙楮。

〈物語四冊の場合〉

前遊紙各冊一丁（但し第四冊目は欠丁）。後遊紙各冊〇～二丁。内題無し。片面九行・一行十八字内外。和歌は改行一字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。本文は流布本系。猶、物語本文中の句点・鉤点に朱筆が入り、本行とは別筆と見られる訂正・書き入れ等の墨書も稀にある。巻一には、本文（経文）の訓みを墨書した付箋一枚も貼付されている。

〈下紐二冊の場合〉

前遊紙各冊一丁。後遊紙〇～一丁。巻首題「下紐第二」「狭衣第二」「狭衣第三」「狭衣第四」。片面九行・一行十五字内外。下紐本文には昌叱説が入る。また系図線に朱墨を使用。

『下紐上』冒頭に、次の〈天正十八年半醒序〉あり。参考のため、前掲中臣祐範本との異同箇所に傍線を引き、続く（　）内にその異文を示す。

此下紐（したひも）といふ狭（さ）衣の抄はなからの橋の
あたりよりよろつの物語をあつめ給へる
中にも筆の誤（あやまり）を写（うつ）しけるまゝことはり
たしかならさる所〳〵をしるすへしとあ
り（有）しかは古本をみるに心も詞もわきか
たくて過行に賀茂の神壇ちかき普
賢堂の僧衆に力を合て造営の次
涅槃（ねはん）経の箱の底に下紐（ひも）と外題にあ
る草子をみるに明神のあたへ給へると」

懐中して帰りけり抑光源氏物語の心
わきまへたらん人は（見解なは）此抄に及（をよ）ふへからす一
条禅閤宗祇なと翫（もてあそ）ひ給はぬにより講
尺など絶（たえ）たるへし系図は逍遥院殿あそ
はしけりつれ〳〵のまきらはしに御覧あ
らん人〳〵猶あやまりをあらためらるへし
天正十八年初冬に書写（書写の功）をはんぬ
沙彌半醒」

『下紐下』最終項目に、年月・書名の無い〈下紐跋〉（祐範本と同文につき略）あり。

同冊最終丁オに、次の本奥書あり。

此抄二冊者去年以昌俔所持之本令本云書写之今茲又以法橋昌琢本按校之了
元和四年應鐘朔日　寛佐

旧蔵者印記「岡田真之蔵書」（複郭朱長方印）。

7　常磐松文庫蔵「さ衣」

写本六冊（目録並年序・系図・下紐・物語）。袋綴（四孔、緑色糸）。角裂れ付き。

表紙寸法一二・四×一八・二糎。

薄縹色無地紙表紙。左肩に卵色金箔散らし書題箋貼付。
題簽寸法一〇・〇×二・七糎。題字は全冊一筆。各冊の外題・巻首題・尾題は以下の通り。

現行冊序	外題（書題簽）	巻首題	尾題
第一冊目	「さ衣年序　全」	「狭衣目録并年序」 「狭衣系圖」	「狭衣目録終」 （ナシ）
第二冊目	「狭衣下ひも」	「狭衣ひも才一」 「狭衣下ひも第二」 「狭衣下ひも第三」 「狭衣下ひも第四」	狭衣下ひも第一終 狭衣下ひも第二終 狭衣下ひも第三終 狭衣下ひも第四終
第三冊目	「さ衣　一（上／下）」	「狭衣巻第一之上」 「狭衣巻第一之下」	狭衣巻第一之上終 狭衣巻第一之下終
第四冊目	「さ衣　二（上／下）」	「狭衣巻第二之上」 「狭衣巻第二之下」	狭衣巻第二之上終 狭衣巻第二之下終
第五冊目	「さ衣　三（上／中／下）」	「狭衣巻第三之上」 「狭衣巻第三之中」 「狭衣巻第三之下」	狭衣巻第三之上終 狭衣巻第三之中終 狭衣巻第三之下終
第六冊目	「さ衣　四（上／中／下）」	「さころも巻第四之上」 「狭衣巻第四之中」 「狭衣巻第四之下」	さころも巻第四之上終 狭衣巻第四之中終 狭衣巻第四之下終

該書は、「狭衣目録并年序」の奥に、次の〈承応三年切臨跋〉を有す。参考のため、承応三年版本との異同を併示する（但し清濁や振り仮名等は略）。

…されは／かきあらはせる所は三代の帝年八十
二ヶ年也この内（此うち）二巻に嵯峨院のあら
ましの時はたとせ世をを（お）さめ給ふ
とある詞とりは（詞によらは）すへて二十九年の春秋
のことゝ（事と）いふへからくのみ　承応甲午
年季夏の（本行ニナシ）比　東京黄臺山釈
切臨扨之

『下ひも』は片面十七行・一行十五字内外。冒頭に〈天正十八年初冬沙彌半醒序〉を、また尾題「狭衣巻第四之下終」の次に丁を代えて、〈天正十九年三月九日臨江斎法眼紹巴奥書〉と〈承応三年切臨跋文〉〈刊記〉を掲載する。以下翻字するが、同じく承応三年版本との異同をしるす。

〈天正十八年初冬沙彌半醒序〉

この（此）下ひもといふさ衣（ごろも）の抄はなからの
はし（橋）のあたりよりよろつの物かたりをあつ
め給へる中にもふて（筆）のあやまりをうつし
けるまゝことわ（は）りたしかならさる所〳〵を
しるすへしと有（あり）しかは古本をみ（見）るに心も

こと葉はわきかたくて過行（ゆく）に賀も（茂）
の神かき（垣）ちかきふけん（普賢）堂の僧衆に
ちからを合せ（ナシ）て造営の次ねはん経
のはこ（箱）の底に下ひも（紐）と下（外）題にある
双紙をみ（見）るに明神のあたへ給へると
懐中してかへりけり抑光源氏の物語
の心見解なは此抄にお（を）よふへからす
一条の（本行ニナシ）禅閤宗祇なとのもてあそひ
給はぬにより講釋なと絶たるへし
系圖は逍遙院殿あそはしけりつれ
つれ（〳〵）のまきらはしに御覧あらん人〻」
猶あやまりをあらためらるへし
天正十八年初冬に書写の功終（をは）りぬ
沙彌半醒

〈天正十九年三月九日臨江斎法眼紹巴奥書〉

この（此）物かたり（語）のはても源氏夢の浮
はし（橋）の面かけ（影）也少年と書そめて
残多（おほ）くかきとゝめたり四冊を

全部も心あるへしはかりかたし
後生の人しるさるへし
天正十九年三月九日
臨江斎法眼紹巴

〈承応三年切臨跋文〉

斯さ衣（ころも）の系譜は西三条逍遙
院入道堯空尊者の御作云々
尤精撰なるへしこのころ他本を集（あつ）め
挍合するに展轅書寫のあやま
りに損落の文字又前後の錯亂
有（あり）て是非をわきまへかたき所（ところ）〈
本書に考合て清書せしめ早　于」
時承應甲午歳仲夏日東
京黄臺山釋野切臨叟
誌之

〈刊記〉

承應三甲午歳季秋吉辰
（ナシ）（烏丸通二条上ル二町目　三木氏親信梓行）

物語は片面十七行・一行十八字内外。和歌は改行一字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。本文は整版本に同じ。最版本の振り仮名・清濁・挿し絵等は省略するが、傍注は転写する。

物語『さ衣四』最終丁に、次の書写奥書を有す。

安政六のとし
神無月はしめうつし終

該書は承応三年版本の安政六年転写本であろう。

旧蔵者印記「万里小路睦子」（単郭朱正方印）。

8　常磐松文庫蔵「狭衣文談」

花菱織茶色新帙入り。左肩に黄色帙題簽を貼付するが、題字無し。

写本全八冊（注釈だが、物語本文も全文掲示する）。袋綴（四孔・白糸）。全冊裏打ち補修済み。

表紙寸法二三・三×一六・七糎。

渋引紙表紙、左肩に「狭衣文談　一の上」（第一冊目、以下准之）と外題と巻序を墨書。見返し白紙。本文料紙楮。片面十行・一行二十二字内外。全冊一筆。

第一冊目、料簡めいた文章のあとに、次の〈文禄三年自序〉あり。

抑此物語は往昔より異本まち〳〵にして
くた〳〵しく紛れたる事のみおほし然るを
下紐にそのことはりを糺すといへど愚耳に

さとしかたき所おほく且又義理のたかひ
なと粗みえ侍れは是を糺しあかさんと
とし月心にかけ侍るに逍遙院より聞書
のものとて一とをり亡父か函の底に残り
とゝまりたるをみいでゝ闇夜に灯をえたる
物からかねて又聞をき侍りける抄物を取
あはせて物語の詞を残らす書つらね　」
その義理をこまかにしるしつけて狭衣
文談と名づく是又他見のためにするには
あらす予か独嘯となさんこゝろにて時々
閑暇に是をうかゝひて今と後との愚
意を又かゝむべき也寸志なを僻案ありもし
後見の人用捨して了簡し侍るへきならし

文禄三年季秋日　桑門

このあと巻首題「狭衣文談巻第一之上」（第一冊目）が入り、奥には「墨付百一」の識語。以下、各冊の巻首題と識語を表示する。

奥書無し。『国書総目録』によれば、該書は現存する唯一の完本である。

旧蔵者印記「松のや蔵書」（単郭朱長方変形印、藤井高尚氏）。物語本文は流布本系。

冊序	巻首題	識語
第一冊目	狭衣文談巻第一之上	墨付百一
第二冊目	狭衣文談巻第一之下	墨付八十八
第三冊目	狭衣文談巻第二之上	墨付七十七
第四冊目	狭衣文談巻第二之下	墨付九十八
第五冊目	狭衣文談巻第三之上	墨付九十二
第六冊目	狭衣文談巻第三之下	墨付九十七
第七冊目	狭衣文談巻第四之上	墨付百三十七
第八冊目	狭衣文談巻第四之下	墨付九十一

9 常磐松文庫蔵「さころも物語」絵巻一巻

紫色平織紐つき漆函入り。絵巻一巻（物語本文は巻一前半の、しかも抄出のみ）。

浅黄色絹布表紙。左肩に白地厚紙書題簽貼付。題簽寸法二一・九×三・四糎。題字「佐古ろも物語」と墨書。押竹付き。

紫色平織り紐（爪無し）。木軸。

紙高二九・八糎×紙幅二六・四糎前後の美濃紙を数枚継いだもの。

見返し白紙。巻首題無し。詞書は一行字数九字前後。巻一前半だけの、それも抄出本文であるが、流布本系に近い。各詞書のあと、群青・緑青・朱丹等を用いた彩色絵が計五枚入っている。画題は以下の通り。

①狭衣、菖蒲を持って源氏宮を訪う。狭衣の恋慕。

②宮中管弦。狭衣が笛を吹き、天稚御子が天降る。

③狭衣源氏宮を訪い、恋慕を訴える。
④狭衣、僧に拐かされそうになった飛鳥井姫君を救う。
⑤狭衣、飛鳥井姫君と将来を約束する。

巻末に花押（人物不明）及び次の奥書あり。

御数寄屋御道具
狭衣物語
詞　伏見院御震（ママ）翰
繪　土佐光秀真跡

該書は、東京博物館蔵『狭衣物語絵巻』模写本（江戸幕府の御用絵師狩野栄信・養信父子による模写）の転写本であろう。両本を比較すると次のような異同がある。

a 詞の部分が字詰め・行取り・挿入句（「はぬにや」）にいたるまで一致する。
b 絵の数・構図も一致する。
c 但し絵⑤の挿入位置のみ異なる。即ち東博本が〔絵④→詞⑤絵⑤〕であるのに対して、該書では〔絵④⑤→詞書⑤〕となっている。
d 花押が一致する。
e 東博本には該書にいう奥書が無く、「栄信模」「養信模」の署名のみある。
f 紙高は該書が二九・八糎、東博本が三二・〇糎で、該書の方が小さい。但し該書には書写終了後、天地を化粧裁ちした形跡がある。

東博本が模写した原本の方は、断簡ではあるが四図四幅に仕立て直したものが、同館に所蔵されている。その一幅に付さ

れた板橋貫雄（一八一〇～七〇）識語によれば、「…正しくかのみくら（稿者注―「東の比えの中堂」寛永寺のこと）にありしものにて、画は土佐光秀朝臣のふで、詞書は伏見の帝の震翰といひ伝たり…」とある。該書の奥書はこれによったものか。

旧蔵者印記無し。

10　黒川文庫蔵十二冊本「さごろも」（＊⑤）

函架番号　黒川一〇八。

紺無地帙入り。左肩に白地帙題簽「さごろも　古写本」を貼付。

写本十二冊（物語）。袋綴（四孔、糸は白と茶の二種）。

表紙寸法二六・八×一九・二糎。

渦文様に花の型押し灰青色紙表紙。中央に朱色題簽貼付。題簽寸法一五・五×三・一糎。題字は「さごろも　一」（第一冊目、以下准之）と外題と冊序を墨書する。各冊とも表紙右肩に黒川家の分類印「物語」（単辺朱円印）を捺し、第一冊目のみ、さらに表紙右下端に「共十二冊」と朱書する。

各冊内訳は、第一・二冊目が巻一、第三～五冊目が巻二、第六～九冊目が巻三、第十～十二冊目が巻四となる。各冊最終本文に余白のあることから、この分冊方法は該書が書写された当初からのものと判断できよう。

見返し白紙。前遊紙各冊一丁。本文料紙楮斐漉き混ぜ。

内題無し。片面十行・一行二十二字内外。和歌は改行二字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。奥書・識語無し。

寄り合い書き。本文は流布本系。

なお、中田剛直氏の『校本狭衣物語』（昭和五一～五三年　桜楓社）で、第一類本系統第二種として対校に用いられた本に「黒川本」なるものがあり、凡例によれば、

黒　黒川本（黒川真頼旧蔵 近世初期写）岡田正之氏旧蔵

とある。

しかし本学所蔵の狭衣物語写本に「岡田正之」印のものは無い。或いはこれは「岡田真之蔵書」（岡田真氏）のことかとも思われるが、この印が捺してあるのは常磐松文庫の諸本である。だが、本学所蔵の黒川文庫の狭衣物語写本が該書一本だけであること、また中田『校本』にいう「黒」の異文が該書の本文とほぼ一致すること等から見て、該書のことかと思われる。

該書には、朱筆による鈎点・句点・異文表示記号「イ」、墨筆による異文注記等の書き入れ等がある。但し目立つのは巻一～二までで、以下は殆ど無い。また第十冊目墨付き本文三十七丁と三十八丁とは前後逆に綴じられている。この錯簡は古くからのものらしく、朱筆書き入れ者もその旨を注記している。

旧蔵者印記「黒川真頼」（単郭朱円印）「黒川真頼蔵書」（単郭朱長方印）「黒川真道蔵書」（単郭朱長方印）。「月明荘」（単郭朱長方印、反町茂雄氏）。

11　山岸文庫蔵鈴鹿本新写「さころも」（＊⑦）

函架番号　山岸五一三一。

新写二冊（物語。但し巻二・巻四のみの端本）。袋綴（四孔・白糸）。

表紙寸法二七・五×一九・五糎。

渋染風紙表紙。中央に白地に複郭刷枠の書題簽貼付。題簽寸法一八・四×三・七糎。題字はそれぞれ「さころも　二」「狭ころも　四」と墨書。

見返し白紙。本文料紙三椏紙。扉各冊一丁。扉題、外題に同じ。巻首題無し。

片面十行・一行十七字内外。和歌は改行二字下げ二行分かち書き、そのまま地の文が後続する。奥書無し。

各冊奥に山岸氏の識語有り。第一冊目、

鈴鹿本甲　与神宮文庫本同系矣　近似于流布之本者也／梶井宮本断簡亦同系也　但末二三行異文也　故又／別系歟雖然断簡之部　即与鈴鹿本・神宮本同者也／昭和九年九月二五日識之

鈴鹿本甲与金沢本亦合矣　但金沢本以大島本系本文／校訂補入　故有複雑之箇所也

第二冊目、

住吉物語（狭衣）　四巻　以鈴鹿本書写者也／原本慶長頃乃至其以前古写本／也　今茲四月末上洛序借覧而／秋十月早書写矣／巻一二両巻誂人　巻三四両巻／於家中書写早／昭和八年十月中浣　霖雨之候也／同月二十二日岸廼舎識

該書は昭和八年の鈴鹿本新写で、それぞれ書写者を異にするが、書本の虫食い痕や貼付された付箋等まで踏襲した忠実な模写本である。但し識語に云う巻一と三は散逸。

旧蔵者印記「岸廼舎蔵」（複郭朱長方印）「山岸文庫」（複郭朱長方印、ともに山岸徳平氏）。

12　山岸文庫蔵「さころも」（＊⑧）

函架番号　山岸三三一〇。

紺無地帙入り。

新写二冊（物語。但し巻一巻二のみの端本）。袋綴（四孔・白糸）。角裂付き。

表紙寸法一六・五×一八・五糎。

渋染風紙表紙。両冊とも、左肩にそれぞれ「さころも　一」「さころも　二」と墨書。また第一冊目のみ、右肩に「宮」（薄い朱書）、右下端に「共三／巻三欠」（墨書）とあるが、本学に現存するのは巻一・二のみで巻四は散逸。

見返し白紙。本文料紙三極紙。扉各一丁（扉題は無く、「一」「二」と巻序を示すのみ）。巻首題無し。片面十行。一行十四字内外。和歌は改行二字下げ二行分かち書き、地の文は改行して後続する。

奥書無し。第一冊目奥に、次の山岸氏の識語有り。

「以一讀之序　加朱点者也　岸廼舎」（朱）

兼載（寿）狭衣抄摘書流布本　狭之書入者也／兼壽書入本　池田氏蔵之　其轉写本／為佐々木信綱氏之蔵矣／奥云「延宝六年五月十三日一校合書入ず訖」

これによれば、該書には山岸氏の朱筆が加わっていることになるが、朱筆は、第一冊目では一部に句点が、第二冊目では「コノ近ヨリ大島本に同ジ（高野本トアワン）」（19オ）「コノ辺マデ大島本ニテ高野本ニアリ」（24オ）等の注記が、それぞれ確認できる。

なお識語では「兼寿狭衣抄」への言及もあるが、該書は猪苗代兼寿の『狭衣抄』（注釈）ではなく、非流布本系物語本文の新写本である。第一冊目表紙にみえる「宮」が底本に関する情報か。また第二冊目奥にも、同じく山岸氏の、諸本分類に関する心覚えとみられる記述があるが、略す。

旧蔵者印記「山岸文庫」（複郭朱長方印）「岸廼舎蔵」（複郭朱長方印）。

13　山岸文庫蔵「狭衣」

函架番号　山岸三三一一。

紺無地帙入り。内閣文庫の新写本四冊（物語）。袋綴（四孔、薄茶色系）。

表紙寸法二六・九×一九・一糎。

渋色格子縞紙表紙（第一・三・四冊目）あるいは渋染紙表紙（第二冊目）。各冊とも左肩に白地に複郭刷枠書題簽を貼付。題簽寸法一八・〇×三・五糎。題字は「狭衣　一」「狭衣　巻二」「狭衣　三」「狭衣　四」と外題と巻序を墨書する。また第一冊目表紙右肩に「内閣文庫本」、第二冊目表紙右肩に「内閣本」、第四冊目題簽下に「止」と墨書。

見返し白紙。本文料紙三椏紙。第一冊目のみ扉一丁（扉題「一」）。前遊紙各冊一～三丁。巻首題無し。片面十一行・一行二十一字内外。和歌は改行二字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。奥書無し。寄合書き。

「書籍館印」（単郭朱正方印）「浅草文庫」（複郭朱長方印）「和学講談所」（複郭朱長方印）「日本政府図書」（単郭朱正方印）「内閣文庫」（単郭朱正方印）の印記を模写。

各冊に、次の山岸氏識語あり。

第一冊目　狭衣物語巻一　内閣文庫本也／昭和二十五年八月以片寄氏写本東京都委／託学生松井氏書写了／昭和二十六年仲呂望　仮綴而書附焉／岸廼舎識

第二冊目　狭衣物語巻二　内閣文庫蔵本也／属教育大学々生諸子書写者也／昭和二十七年三月中浣／三月三十一日朝記之／

内閣本狭衣巻一、三、四　先年書写了／巻二荏苒経数年矣今茲一月製本依嘱／二月十七日製本了／今日於書陵部　曲籍解題漢籍打合会有之／昭和三十一年二月十七日夜記之／岸廼舎識

第三冊目　狭衣／内閣本　石崎氏写焉／昭和二十六年夏八月
第四冊目　狭衣／内閣本　石崎氏書写者也　昭和二十六年夏八月
旧蔵者印記「山岸文庫」（複郭朱長方印）。

14　山岸文庫蔵「さころも」
函架番号　山岸三三一二。
紺無地帙入り。松井氏の新写本一冊（物語。但し巻三のみ。これに巻一・二の首尾が加わる）。
袋綴（四孔、白糸）。表紙寸法二七・五×一九・六糎。
渋染風紙表紙。左肩に白地複郭刷枠書題簽貼付。題簽寸法一八・五×三・七糎。題字「さころも（巻一巻二首尾）　巻三」。表紙右肩に「松井本」、右下端に「共一」と墨書し、右下端に「山岸文庫」（複郭朱長方印）を捺す。
見返し白紙。本文料紙三椏紙。扉各巻一丁。中央部に扉題「（松井本巻四缺）さころも　一」（巻一首尾分）「さころも　二」（巻二首尾分）「さころも　三」（巻三分）を墨書し、いずれも「山岸文庫」（複郭朱長方印）を捺す。
巻首題無し。片面十三行・一行二十四字内外。和歌は改行二字下げ一行書き、地の文は改行して後続する。巻三のみ本文訂正（誤写の訂正か）と異文表記に朱筆が入る。
奥書なし。奥に、次の山岸氏の識語あり。

狭衣物語三冊　松井博士蔵本也　巻四缺本
圖書寮蔵列帖色紙三冊本（巻三欠本）同系也
今書寫松井本巻三補圖書寮本者也

松井本（巻四缺巻之分）与圖書寮列帖本（巻三缺巻之分）
全同系也
昭和八年十一月二十三日斜陽窗下識焉
岸廼舎
今茲十一月上浣於家中書写者也
旧蔵者印記「山岸文庫」（複郭朱長方印）。

【古活字版の部】

15　常磐松文庫蔵「古活字版狭衣物語」（＊④）
草花織文薄緑帙入り。左肩に帙題簽「狭衣物語」を貼付。
古活字本八冊（物語）。袋綴（四孔、但し旧綴孔あり。青糸だが、第八冊目のみ茶色糸）。表紙寸法二八・〇×一九・六糎。渦文様地に草花型押し紺色紙表紙。八冊中四冊のみ（第二・三・五・六冊目）、左肩に白地刷題簽が残る。題簽寸法一七・二×三・五糎。題字は「狭衣　巻第二上」（第二冊目、以下准之）と外題と巻序を示す。
見返し白紙。本文料紙楮。全冊裏打補修済み。
版式（無辺無界。字高一六・四糎。片面十二行・一行二十一字内外。版心注記無し）。
各冊とも、巻首題と尾題、またのど奥に巻序と丁付（ただし綴糸の奥で、影印ではみえない）あり。
次に冊毎の巻首題・尾題・丁付を表にまとめる。

冊序	巻首題	尾題	のど奥の巻序丁付
第一冊目	狭衣巻第一之上	狭衣巻第一之上	「一ノ一」～「一ノ四十三」
第二冊目	狭衣巻第一之下	狭衣巻第一之下	「二ノ一」～「二ノ三十六」
第三冊目	狭衣巻第二之上	狭衣巻第二之上	「三ノ一」～「三ノ四十」
第四冊目	狭衣巻第二之下	狭衣巻第二之下	「四ノ一」～「四ノ四十」
第五冊目	狭衣巻第三之上	三上	「五ノ一」～「五ノ五十八」
第六冊目	狭衣巻第三之下	狭衣巻第三之下	「六ノ一」～「六ノ六十三」
第七冊目	狭衣巻第四之上	狭衣巻第四之上	「七ノ一」～「七ノ七十八」
第八冊目	狭衣巻第四之下	狭衣巻第四之下	「八ノ一」～「八ノ四十九」

和歌は改行二字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。奥書無し。無刊記。

第一冊目本文一丁表によれば、川瀬一馬『増補古活字版之研究』所載〈元和中無刊記本（イ）種〉の図版に同じ。

第二・三・五・六・七冊目奥に「柳野」、第四・八冊目奥に「柳野所持本」の識語。

一部墨筆による本文訂正等の書き入れあり。

旧蔵者印記なし。

16　黒川文庫蔵「古活字版狭衣」（＊⑥）

函架番号　黒川一〇九。

紺無地帙入り。左肩に白地帙題簽「狭衣　古活字本」を貼付。側面にも「狭衣　古活字本」と墨書した小紙片を貼付。

古活字版八冊（物語）。袋綴（四孔、青糸）。表紙寸法二八・〇×二〇・七糎。

渦文様地に花の空押し原装丹表紙。中央に白地刷題簽貼付。題簽寸法一七・六×三・五糎。題字は「狭衣　巻第一上」（第一冊目、以下准之）と、外題と巻序を示す、各冊とも右肩に黒川文庫の分類印「物語」（単辺朱円印）を捺し、更に第一冊目のみ、右下端に「共八冊」と墨書する。

見返し白紙。本文料紙楮。

版式（無辺無界。字高二一・八糎。片面十二行・一行二十一字内外。版心注記無し。のどに巻序・丁付あり）。巻首題・尾題あり。詳細は前掲常磐松文庫蔵「古活字版狭衣」の表に同じ。奥書・識語無し。無刊記。

第一冊目一丁オによれば、前掲『増補古活字本之研究』所載「元和中無刊記本（ロ）種」の図版に同じ。また同丁によって元和中無刊記本（イ）（ロ）の二種を比較するに、一三七活字中三七活字（連綿体も一字毎に区切って計算）を異にする。

旧蔵者印記「黒川真頼」（単辺朱円印）「黒川真頼蔵書」（単郭朱長方印）「黒川真道蔵書」（単郭朱長方印）「筒井蔵書」（単郭朱大型円印）。

17　黒川文庫蔵「古活字版狭衣」

函架番号　黒川「補遺」。

黄色地花菱模様帙入り。

古活字本四冊（物語）。袋綴（四孔、肌色糸）。全冊裏打補修済み。表紙寸法二七・二×一九・八糎。

香色無地後補紙表紙。左肩に白地後補書題簽貼付。題簽寸法一八・一×三・六糎。題字は「狭衣　一」（第一冊目、以下准之）と外題と巻序を示す。各冊表紙右肩に黒川家の分類印「物語」（単郭朱丸印）を捺し、更に第一冊目のみ、表紙右

肩に「活字本」（朱書）「源道別挍合本　共四冊」（墨書）の書き入れあり。
見返し白紙。本文料紙楮。
版式（無辺無界。字高二一・八糎。片面十二行・一行二十一字内外。版心注記無し。のどの奥に巻序と丁付あり）。
各冊に前掲常磐松文庫本に同じ巻首題・尾題あり。
和歌は改行二字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま後続する。
無刊記。第一冊目本文一丁表によれば、前掲『増補古活字版之研究』所載〈元和中無刊記本（ロ）種〉の図版に同じ。
但し、該書の場合、版心に墨筆による丁付の書き入れあり、また巻三上の二六オ～二七丁ウ、巻四上二オ～三丁ウ、巻四下八オウ・十六オウ・三十五オは補写。
全冊に朱・墨（濃淡二種）・青墨筆による書き入れ（校合・頭注傍注等）多数。胡粉を用いて物語本文の仮名遣い等を訂正した例もある。頭注には「契沖云」「春海云」「道（道別か）按」等の肩付きがある。筆跡から推すに、校合の多くは同筆で、第一冊目表紙の墨筆注記では、源道別（信夫顕祖、天保三年没六十八才）とする。
第四冊目奥に、次の三種の識語あり。

「文化十年歳次癸酉三月七日校合早」（濃墨）

「元和九年五月中旬心也開板
　右ハ活字一本（村尾氏蔵本）ニ此ノ如ク年号及心也開板ノ字アリ此ノ本
　版ハ同シクシテ殖ヤウ異ナリ故ニ活字一本ト記シツ」（朱）

「燈山一校早　源道別（花押）」（淡墨）

第一冊目前見返しにペン書きによる次の付箋が貼付。

道別、由豆流　真頼伝来　ルチルス
新宮城旧蔵古活字本狭衣　全四冊
昭和二十一年一月二十四日於弘文荘

旧蔵者印記「鐘礼岳文庫」（複郭朱長方印、但し第一・二冊目では切り取られて、補強紙を裏打ちした上に、後述する岸本由豆流や黒川家の印記が捺されてある）。「朝田家蔵書」（複郭朱長方印）「岸本家蔵書」（複郭朱長方印）「王乃由豆流」（単郭朱長方印、以上三種、岸本由豆流）。「新宮城蔵書」（単郭朱長方印、水野土佐守忠央）。「黒川真道蔵書」「黒川真頼蔵書」「月明荘」。

18　山岸文庫蔵「古活字版狭衣」

函架番号　山岸一二三六。

紺無地帙入り。十冊（古活字版七冊は物語。但し巻三之上欠。「系図」補写一冊。「下紐」補写二冊、但し巻三・四の分は欠）。

袋綴（四孔、小豆色糸）。表紙寸法二七・六×一九・四糎。

青灰色地金泥草花模様後補紙表紙（古活字本。補写本は地色のみ緑色に替える）。左肩に入子菱地草花型押し金箔書題簽貼付。題簽寸法二二・一×三・七糎。題字は全冊一筆。

〈補写『系図』一冊の場合〉

書題簽、題字「さころも　系図」（墨書）。題簽下に「義」の朱書、さらに表紙右下端に山岸氏の筆で「系図／下紐／附共十冊」と墨書。内題「狭衣系圖」。見返し白紙。本文料紙楮。跋文はないが切臨の系図（版本）に一致する。系図

線・頭点には朱墨を使用。後見返しに、次の山岸氏識語。

松雲堂老人ヨリ老人（他界）（三十七年三月末日）／昭和三十六年十一月中浣／田島道治氏周旋ニテ茜部氏／蔵書ヲ松雲堂老人ニ談合云々

〈古活字版「物語」七冊の場合〉

刷題簽、題字「さころも　一之上」（墨書。第一冊目、以下准之）と墨書。物語第一冊目のみ、題簽下に「義」の朱書。

見返し白紙。本文料紙楮。

版式（無辺無界。字高二一・八糎。片面十二行・一行二十一字内外。版心注記なし。のどの奥に巻序と丁付あり）。

各冊に前掲常磐松文庫本と同じ巻首題・尾題がある。

無刊記。前掲常磐松文庫本と同版。

〈補写『下紐』二冊の場合〉

書題簽の題字・内題・尾題は次の通り。

題字	内題	尾題
さころも　下紐一	（ナシ）	狭衣下紐第一終
さころも　下紐二	狭衣下紐第二	（ナシ）

見返し白紙。本文料紙楮。冒頭に〈下紐序文〉が無い。下紐は巻二まで。本文は切臨の校訂（整版）と同文。

系図線に朱筆を使用。

旧蔵者印記「山岸文庫」（複郭朱長方印）。

【版本の部】

19　山岸文庫蔵承応版十六冊本

函架番号　山岸一二三八。

紺無地帙入り。整版十六冊（『目録並年序』一冊『系図』一冊『物語』十冊『下紐』四冊）。袋綴（四孔・白糸）。表紙寸法二三・一×一五・九糎。

薄縹色布目地模様紙表紙。左肩に白地刷題簽貼付。題簽寸法一五・六×二・八糎。

但し例外もあるため、以下各冊毎に題字を列記する。

「狭衣目録并序」（題簽剝離につき墨書）

「狭衣系図　全」（刷題簽。但し「全」のみ一部補筆）

「さころも巻一上」（題簽剝離につき表紙にそのまま墨書）

「さころも巻一下」（題簽剝離につき表紙にそのまま墨書）

「さころも二之上」（刷題簽）

「さころも二之下」（刷題簽）

「さころも三之□（破損）」（刷題簽その下に「巻三上」と墨書）

「さころも□□□（破損）」（刷題簽その下に「三之中」と墨書）

「さころも三之下」（刷題簽）
「さころも四之上」（刷題簽）
「□□（虫損）ろも四之□（虫損）」（刷題簽その下に「巻中」と墨書）
「さころも巻四之下止」（刷題簽剝離につき表紙にそのまま墨書）
「□□（損傷）も一」（刷題簽、題簽の上に加筆して「下紐一」と墨書）
「下□（虫損）も二」（刷題簽）
「下ひも三」（刷題簽）
「下ひも四」（刷題簽）

各冊、表紙右下端に「山岸文庫」（複郭朱長方印）の印と「共一六冊」の墨書あり。

各冊表紙の右上端と中央下辺、および小口に、計三種類の冊序書き入れあり。但し冊の整序で混乱したらしく、『目録并年序』を「一」とする点は三種共通しているものの、刊記のある『系図』をどこに入れるか、また『物語』と『下紐』の前後関係をどうするか等で問題が生じたらしく、冊序は三種三様である。訂正を繰り返し、なかには途中で放棄したものもある。

見返し白紙。本文料紙楮。

版式（単辺無界。内郭一六・五×一一・五糎。片面十一行、一行二十一字内外。版心に版心題・巻序・丁付を記載）。

各冊とも巻首題と尾題を有し、物語には挿絵が入る。以下、表にまとめる。

巻首題	尾題	版心題	丁付	挿絵
狭衣目録并年序	狭衣目録終	狭衣目	一～十三終	
狭衣系圖	（ナシ）	狭衣系	一～十六	
狭衣巻第一之上	狭衣巻第一之上終	狭衣一之上	一～五十二終	八枚
狭衣巻第一之下	狭衣巻第一之下終	狭衣一之下	一～四十三終	四枚
狭衣巻第二之上	狭衣巻第二之上終	狭衣二之上	一～四十八終	四枚
狭衣巻第二之下	狭衣巻第二之下終	狭衣二之下	一～六十終	六枚
狭衣巻第三之上	狭衣巻第三之上終	狭衣三之上	一～四十三終	三枚
狭衣巻第三之中	狭衣巻第三之中終	狭衣三之中	一～四十八終	四枚
狭衣巻第三之下	狭衣巻第三之下終	狭衣三之下	一～五十終	四枚
狭衣巻第四之上	狭衣巻第四之上終	狭衣四之上	一～四十八終	四枚
狭衣巻第四之中	狭衣巻第四之中終	狭衣四之中	一～五十三終	五枚
狭衣巻第四之下	狭衣巻第四之下終	狭衣四之下	一～三十六終	六枚
狭衣下紐第一	狭衣下紐第一終	狭衣抄一	一～五十二終	
狭衣下紐第二	狭衣下紐第二終	狭衣抄二	一～二十五終	
狭衣下紐第三	狭衣下紐第三終	狭衣抄三	一～二十六終	
狭衣下紐第四	狭衣下紐第四終	狭衣抄四	一～十七終	

次に物語掲載の挿絵について、主題と丁付を表示する。

巻序	挿絵主題	丁付
巻一上	①狭衣、花を源氏宮に手渡す	2オ

	②狭衣、牛車にて菖蒲歌を受ける	12オ
	③宮中管弦宴	16ウ
	④天若御子降臨	20ウ
	⑤狭衣、在五中将日記をみる源氏宮に求愛	30オ
	⑥狭衣、女二宮降嫁の件につき、母宮と語りあう	36ウ
	⑦狭衣、女車にあい、僧の同乗に不審	41オ
	⑧狭衣、飛鳥井姫君を送り届ける	46オ
巻一下	①狭衣、洞院上の養女となった今姫君の部屋を訪ねる	11オ
	②狭衣、飛鳥井姫君と変わらぬ愛を誓う	21ウ
	③飛鳥井姫君、欺かれて筑紫行きの船にのる	30オ
	④狭衣、失踪した飛鳥井姫君を想う	40オ
巻二上	①狭衣、弘徽殿にて女二宮たちのくつろぐ姿を垣間見る	10オ
	②狭衣、中宮の許で後朝の文をかく	17オ
	③母宮（嵯峨皇太后）、女二宮の懐妊を知る	30オ
	④狭衣、嵯峨皇太后の病気見舞いに赴く	42オ
巻二下	①狭衣、池の鴛鴦を眺め出家した女二の宮を想う	10オ
	②雪の朝、狭衣、雪山に興じる源氏宮を垣間見る	15ウ
	③狭衣、若宮五十日の祝いに参内	26ウ
	④狭衣、入内間近かの源氏宮の琴の音に、そっと笛をあわせる	35オ
	⑤狭衣、斎院（源氏宮）の袖を捉えて恋慕の情を訴える	45ウ
	⑥狭衣、粉河寺に到着、参詣す	55ウ
巻三上	①一条宮を訪ねた狭衣に、若宮なつく	10ウ

	②今姫君と母代の狂態に、狭衣あきれる	22オ
	③宰相中将、今姫君の寝所に忍び、母代女房たち惑乱する	39ウ
巻三中	①若宮と納涼した狭衣、入道宮に大和撫子を送ろうとする	15オ
	②入道宮（女二宮）独詠	22オ
	③狭衣、姫君を抱き上げて飛鳥井姫君を追慕	36オ
	④堀川関白邸にて、若宮（女二宮腹）袴着式	44ウ
巻三下	①狭衣、斎院の猫をみつけ、愛でる	3オ
	②斎院御禊行列	13オ
	③宰相の乳母、若宮を抱き、狭衣の居る鈎設に参る	30ウ
	④賀茂神社での相嘗祭、神楽	40ウ
巻四上	①狭衣、若宮とともに嵯峨院に参内し、出家の噂を否定する	11ウ
	②堀川関白、院の女御に伺候し、斎院の文を見る	17オ
	③大納言や宰相中将ら、斎院を訪れ、桜の下で蹴鞠に興じる	25オ
	④狭衣、東宮に伺候し、式部卿宮姫君の文を見る	39ウ
巻四中	①狭衣、亀山にて静養中の尼君（宰相中将母）を訪問	4ウ
	②帰途につく狭衣を、人々は賞賛し眺める	15オ
	③狭衣、式部卿宮姫君の許に忍び込む	24ウ
	④狭衣、姫君の枕もとで贈歌、姫君心の中で歌を返す	30ウ
	⑤正月、狭衣邸での粥杖の祝い。若宮、狭衣に粥杖を渡す	45オ
巻四下	①即位目前の狭衣、斎院を訪れ贈答歌を交わす	9ウ
	②賀茂祭を目前に、狭衣帝、斎院に扇を贈る	21オ

③狭衣帝、堀川院に行幸	26ウ
④兵部卿宮（女二宮腹）、狭衣帝使者として嵯峨院に赴く	36オ
⑤弘徽殿を訪ねた狭衣帝、飛鳥井姫君日記を発見、これを読む	47オ
⑥嵯峨院危篤。狭衣帝、行幸して見舞う	52オ

『目録并年序』の最終項目に、次の〈承応三年切臨署名〉

…さればかきあらはせる所は三代（みよ）の帝年八十二ヶ年也此うち
二巻に嵯峨院のあらましの時はたとせ世をおさめ給ふ
とある詞によらはすべて二十九年の春秋の事といふべ
からくのみ承應甲午年季夏（きかの）比東京黄臺山釋
切臨　扨（かたふ）レ之ヲ

『系図』の最終丁（最終丁付は「十六」とあるが、当該丁はそのあとに付されたもので、丁付無し）に、次の〈承応三年切臨系図跋〉

斯さころもの系譜は西三條逍遙院
入道堯空尊者の御作云々尤精撰なる
へしこのころ他本をあつめ校合するに
展轉書寫のあやまりに損落の文字
又前後の錯亂ありて是非をわき
まへかたきところ〳〵本書に考合て清

書せしめ早于時承應甲午歳仲
夏日東京黄臺山釋野切臨叟誌之
同丁ウに刊記
承應三甲午歳季秋吉辰

烏丸通二条上ル二町目　三木氏親信梓行

『下紐巻一』冒頭に、次の〈天正十八年半醒序〉

此下ひもといふさごろもの抄はながらの橋の
あたりよりよろづの物がたりをあつめ給へる中
にも筆のあやまりをうつしけるまゝことはり
たしかならざる所〳〵をしるすべしとありし
かば古本を見るに心もこと葉もわきかたくて
過ゆくに賀茂の神垣ちかき普賢堂の僧
衆にちからを合て造営の次ねはん経の箱
の底に下紐と外題にある双紙を見るに明神
のあたへ給へると懐中してかへりけり抑
光源氏の物語の心見解なば此抄にをよぶべか」オ
らず一条禅閤宗祇などのもてあそび給はぬに

より講釈など絶たるべし系圖は逍遙院殿
あそばしけりつれ〳〵のまぎらはしに御覧あら
ん人々猶あやまりをあらためらるへし
天正十八年初冬に書写の功をはりぬ沙彌半醒

『下紐第四』文末に、次の〈天正十九年紹巴奥書〉

此物語のはても源氏夢の浮橋の面影也
少年と書そめて残おほくかきとゝめたり四冊
を全部も心あるべしはかりがたし後生の人
しるさるへし
天正十九年三月九日　臨江斎法眼紹巴

を収載する。

旧蔵者印記「田邊蔵書」（複郭朱長方印）「山岸氏蔵書印」（単郭朱丸印）「山岸文庫」（複郭朱長方印）他。

該書は書き入れ・校合等も殆どなく、本学所蔵の版本中では承応三年版本の基本的な姿を最もよく伝えていると思われる。

山岸氏以前の校勘書き入れは次の二種。

・左衛門佐宣孝女／大貳三位著／母紫式部

（「目録并年序」および「物語巻一下」前見返し）

・左衛門佐（或ハ権）藤原宣孝女／太宰大貳高橋成章妻／大貳三位著／母紫式部

（「物語巻一上」前見返し）

山岸氏の識語および校勘は次の三種。

・承應三年秋／紀元二千三百十三年／後光明天皇の代家綱将軍の代／はやき月日のなかれなるかも／大正二年夏七月／紀元二千五百七十三年／伊比子の里にて　山岸徳平　（「系図」後見返し）

・天正十九年三月九日／紀元二千二百五十一年／後陽成天皇の代　秀吉太閤と称せし時／大正二年七月二十九日／紀元二千五百七十三年　山岸徳平　（「下紐」巻四後見返し）

・狭衣十二冊／目録并年序／狭衣系圖／巻一上下　巻二上下／巻三上中下　巻四上中下止

狭衣下比毛／巻一巻二／巻三巻四止

作者不明　俗説如下／大貳三位賢作／弁局作／共十六冊六条斎院の宣旨　（「目録并年序」前見返し）

20　黒川文庫蔵寛政版本五冊

函架番号　黒川一一〇。

整版五冊（物語四冊。目録並年序・系図・下紐で一冊）。

袋綴（四孔・後綴茶色糸）。表紙寸法二二・三×一五・四糎。

香色地草花具引き紙表紙。題簽が現存するのは、物語巻第一上下が収載されてある第一冊目のみ。しかも一部欠損している。それによれば、表紙左肩に卵色単郭刷題簽貼付。題簽寸法一三・九以上×三・六糎。題字「□（欠損）古ろも　一」。現行はその上に墨筆を補い「一」に見せ消ちを打ち「老」と訂正する。巻二の題簽を第一冊目に転用したものであろう。他の四冊は、表紙左肩にある題簽剝離の痕に、「二」「三」「四」「狭衣物語」と墨書。

最後の「狭衣物語」と墨書された冊には「目録并年序」「系図」「下紐」が綴じられてあるが、前見返しに破損題簽の一部が貼付、それによれば卵色地単郭刷題簽「下ひも」とだけ読める。

各冊とも表紙右肩に黒川家の分類印「物語」（単郭朱丸印）を捺す。また第一冊目に「中村秋香校本」（朱書、黒川真道筆）、第五冊目に「共五」（墨書、他筆）の書き入れがある。揃本のなかの一冊にのみ記された「共五」の如き注記は、冒頭の冊に入るのが普通であろうから、黒川家に入る以前は現行第五冊目を冒頭の冊とした時期もあったものか。

見返しは、第一冊目に「中村秋香校本」と朱書する以外、他は白紙。

本文料紙楮。

版式（単辺無界。内郭一六・六×一一・五糎。片面十一行・一行二十一字内外。版心に版心題・巻序・丁付有り）。

各冊巻首題・尾題・挿絵あり。以下、冊ごとにまとめる。

現行冊序	巻首題	尾題	版心題	丁付	挿絵
第一冊目	狭衣巻第一之上	狭衣巻第一之上終	狭衣一之上	一～五十二終	八枚
	狭衣巻第一之下	狭衣巻第一之下終	狭衣一之下	一～四十三終	四枚
第二冊目	狭衣巻第二之上	狭衣巻第二之上終	狭衣二之上	一～四十八終	四枚
	狭衣巻第二之下	狭衣巻第二之下終	狭衣二之下	一～六十終	六枚
第三冊目	狭衣巻第三之上	狭衣巻第三之上	狭衣三之上	一～四十三終	三枚
	狭衣巻第三之中	狭衣巻第三之中終	狭衣三之中	一～四十八終	四枚
	狭衣巻第三之下	狭衣巻第三之下終	狭衣三之下	一～五十終	四枚
第四冊目	狭衣巻第四之上	狭衣巻第四之上終	狭衣四之上	一～四十八終	四枚

	狭衣巻第四之中	狭衣巻第四之中終	狭衣四之中	一～五十三終	五枚
	狭衣巻第四之下	狭衣巻第四之下終	狭衣四之下	一～五十六終	六枚
第五冊目	狭衣目録并年序	狭衣目録終	狭衣目	一～十三終	
	狭衣系図	（ナシ）	狭衣系	一～十六	
	狭衣下紐第一	狭衣下紐第一終	狭衣抄一	一～五十二終	
	狭衣下紐第二	狭衣下紐第二終	狭衣抄二	一～二十五終	
	狭衣下紐第三	狭衣下紐第三終	狭衣抄三	一～二十六終	
	狭衣下紐第四	狭衣下紐第四終	狭衣抄四	一～十七終	

第四冊目本文最終丁（丁付は「狭衣四之下　五十六終」でおわり、その次に丁付無しの一丁が入る）オに〈承応三年切臨系図跋〉（前出）、そのウに次の刊記

寛政十一年巳未ノ秋
寺町二条下ル丁
三木安兵衛（親信改名）
承応三甲午歳季秋吉辰
烏丸通二条上ル二丁目
三木氏親信梓行

第五冊目「目録并年序」の最終項に〈承応三年切臨署名〉（前出）、「下紐」冒頭に〈沙彌半醒序〉（前出）、「下紐」奥に〈紹巴奥書〉（前出）あり。

刊記に依れば、該書は承応三年版本（十六冊本か）の寛政十一年再版本。その際三木氏は十六冊本を五冊本にまとめ、表

紙・題簽を付け替え、かつ「系図」奥にあった最終丁（オに切臨の系図跋、ウに承応三年刊記）を「物語」巻四の最後に移したものと思われる。

識語、第一冊目「物語」巻一の前見返しに

「中村秋香校本」（朱）

第四冊目「物語」巻四最終丁（五六丁）ウに

「右　中村秋香挍本也　明治四十三年十二月二十六日

購求す　真道」（朱）

の朱書がある。

該書には「物語」全冊にわたって、朱筆（校合・注記）、墨筆（校合・注記）、青墨（本文訂正）による書き入れがある。朱筆校合には「英」「古」「活」「古活」、墨筆校合には「寛光氏校正本」等の諸本略号が、また朱筆注記には「濱臣先生云」と肩付きされたものが多く、他に「契沖云」「保孝按」「春海考」等もある。第二冊目「物語」巻二上の四十一丁目は補写だが、この丁にも同様の書き入れがある。また「下紐」巻一冒頭丁の余白には

抄　岸本弓弦所蔵狭衣抄トイフアリ今拠之補訂了

下紐ノ説トテヒケル処アリ後人補考セシモノ也

朱書即抄也

の朱書があり、下紐本文中にも多くの朱筆書き入れがある。

色を替えてはいるが、おそらくこれらは同筆で、真道のいう「中村秋香筆」であろう。

旧蔵者印記「黒川真道蔵書」（単郭朱長方印）

21　黒川文庫蔵承応版本十冊本

函架番号　黒川一一一。

整版十冊（目録・物語）。袋綴（四孔。小豆色又は白糸、但しいずれも後綴か）。

表紙寸法二二・六×一五・八糎。

紺無地紙表紙。表紙左肩に白地刷題簽貼付。題簽寸法一六・八×二・七糎。題字「さころも　二之上」（第三冊目、以下准之）と外題と巻序を示す。

各冊表紙右肩に黒川家の分類印「物語」（単郭朱丸印）を捺し、更に第一冊目は、表紙右肩に「書入本／真頼書入本」その下に「共十冊」の、いずれも朱書。第十冊目表紙も、同じく右肩に「狭衣大将皇位継承」の朱書がある。

見返し白紙。本文料紙楮。

版式（単辺無界。内郭一六・五×一一・四糎。片面十一行・一行二十一字内外。版心に版心題・巻序・丁付）。各冊に巻首題・尾題・挿絵あり。

各冊の分冊状況、並びに巻首題・尾題・版心題・丁付・物語の挿絵数は下記の通り。

現行冊序	巻首題	尾題	版心題	丁付	挿絵
第一冊目	狭衣巻第一之下	狭衣目録終	狭衣目	一～十三終	
	狭衣目録并年序	狭衣巻第一之上終	狭衣一之上	一～五十二終	八枚
第二冊目	狭衣巻第一之上	狭衣巻第一之下終	狭衣一之下	一～四十三終	四枚
第三冊目	狭衣巻第二之上	狭衣巻第二之上終	狭衣二之上	一～四十八終	四枚
第四冊目	狭衣巻第二之下	狭衣巻第二之下終	狭衣二之下	一～六十終	六枚
第五冊目	狭衣巻第三之上	狭衣巻第三之上	狭衣三之上	一～四十三終	三枚

第六冊目	狭衣巻第三之中	狭衣巻第三之中終	狭衣三之中	一～四十八終	四枚
第七冊目	狭衣巻第三之下	狭衣巻第三之下終	狭衣三之下	一～五十終	四枚
第八冊目	狭衣巻第四之上	狭衣巻第四之上終	狭衣四之上	一～四十八終	四枚
第九冊目	狭衣巻第四之中	狭衣巻第四之中終	狭衣四之中	一～五十三終	五枚
第十冊目	狭衣巻第四之下	狭衣巻第四之下終	狭衣四之下	一～五十六終	六枚

第一冊目「目録并年序」の文末に〈承応三年切臨署名〉あり。無刊記。

主立った識語等は次の通り。

（第一冊目前見返し）

古本筆者

巻一　二條院讃岐

巻二　越部禅尼　首一葉為家卿補写

巻三　為家卿

巻四　後土御門院勾當内侍

此古本松平周防守乃家にあり

（第一冊目「巻一之上」冒頭丁の余白）

古トアルハ古本也　屋代弘賢ガ校合本ニモ此ノ古本ヲ比校シタリ

（第二冊目「巻一之下」冒頭丁の余白）

古トアルハ古本ナリ　屋代弘賢ガ比校セルモ此ノ古本ナリ

（第八冊目「巻四之上」前見返し）
「四巻為家卿筆」（朱）
（第十冊目「巻四之下」最終丁の余白）
「寛政五とせ十一月古本もて考へしるせり　平春海」（朱）
「明治十年十一月一讀了　黒川真頼／同十七年八月以家蔵古寫本比校了　真頼」（朱）
（第十冊目後見返し）
「屋代本奥書墨書」（朱）
此ものかたりの挍本春海かもてるを人してかりて／弟子におほせてうつしとりぬ享和二とせなか月／はつかあまり　みなもとのひろ賢

識語の通り、該書には朱筆による古本との校合や注記、墨筆による注記、青墨による注記（巻二の上下のみ）等、おびただしい書き入れがある。多くは真頼の筆とみられるが、真頼以前からのものも含まれているようである。
旧蔵者印記「黒川真頼」（単郭朱丸印）「黒川真頼蔵書」（単郭朱長方印）「黒川真道蔵書」（単郭朱長方印）等。

22　黒川文庫蔵十冊本
函架番号　黒川一一二。
整版十冊（目録并年序・物語）。袋綴（四孔、白糸・茶色糸）
表紙寸法二二・三×一六・〇糎。
紺無地厚紙表紙。黒川一一一本よりもやや厚手か。表紙中央に白地刷題簽貼付。題簽寸法一五・三×二・八糎。題字は、

「さころも一之上」（第一冊目、以下准之）と外題と巻序を示す。各冊表紙右肩に黒川家の分類印「物語」を捺し、更に第一冊目のみ、表紙右肩に「書入本」その下に「共十冊」の朱書がある。

見返し白紙。本文料紙楮。

版式（単辺無界。内郭一六・六×一一・六糎。片面十一行・一行二十一字内外。版心に版心題・丁付あり）。各冊に巻首題と尾題、物語には挿絵あり。前出黒川一一一本との異同は刷題簽の貼付位置程度で、ともに無刊記。また各冊の分冊状況・巻首題・尾題・版心題・丁付・挿絵数・「目録并年序」奥の〈承応三年切臨署名〉等もすべて一致する。

旧蔵者印記「黒川真頼蔵書」（単郭朱長方印）「黒川真道蔵書」（単郭朱長方印）。

朱筆による校合（比校本略号「校本」「官本」「古本」等）・勘注書き入れ、墨筆による勘注書き入れ（「下紐」抜粋あり）があり、中には付箋を付してのものや系図の控えとみられる紙片も挟んである。

23　山岸文庫蔵十冊本

函架番号　山岸一二三五。

紺無地帙入り。

整版十冊（物語）。

紺無地紙表紙。中央に白色布目地模様刷題簽貼付。題簽寸法一四・〇×二・八糎。

題字は「狭ころも　一之上」（第一冊目、以下准之）と、外題と巻序を示す。

見返し白紙。本文料紙楮。

版式（単辺無界。内郭一七・〇×一一・一糎。片面十一行・一行二十一字内外。版心に版心題・巻序・丁付を付す）

各冊巻首題・尾題・挿絵あり。無刊記。

「目録并年序」が無いこと、刷題簽が布目地模様で中央に貼付してあることを除き、他は前出黒川十冊本に同じ。

旧蔵者印記、「松乃や蔵書」（単郭朱長方変形印、藤井高尚氏）、「山岸文庫」（複郭朱長方印）他。

第一冊目前見返しに次の識語

「古本筆者

巻一　二条院讃岐　巻二　越部禅尼首一葉為家卿写

巻三　為家卿　巻四　後土御門勾當内侍

此古本松平周防守の家にあり」（朱）

全冊、朱・墨・青三筆を用いての校合（比校本略号「古本」「イ本」）および勘注（「濱臣按」「契沖云」等の肩付きあり）等の書き入れがある。黒川一一一本の書き入れと類似するが、相互に異同もある。筆跡から見て山岸氏の筆でないことから、該書の書き入れはそれ以前からのものと思われる。比校した「古本」に関する第一冊目見返しの識語がほぼ同一であることから推すに、該書と黒川一一一本とが用いた「古本」なるものが共通していたのではあるまいか。

24　山岸文庫蔵六冊本

函架番号　山岸一二三七。

紺無地帙入り。

整版六冊（目録并年序・物語・下紐・系図）。

袋綴（四孔、後綴茶色糸）。表紙寸法二二・五×一五・九糎。

紺布目地に草花空押紙表紙。左肩に白地刷題簽貼付。題簽寸法一五・二×二・七糎。題字は全冊「さころも」で統一。この刷題字の筆跡は黒川一一一・同一一二等と同じだが、巻序が入らず、その分寸法も短い。

猶、識別のためか、各冊題簽わきにそれぞれ「巻一　附目録年立」「巻二」「巻三」「巻四」「下紐上」「下紐下」と朱書。この朱筆者は物語本文中にも校訂を施す。また全冊表紙右下に「山岸文庫」（複郭朱長方印）を捺し、第一冊目のみ、その下に「共六」と朱書。

見返し白紙。本文料紙楮。

版式（単辺無界。内郭一六・六×一一・五糎。片面十一行・一行二十一字内外。版心に版心題・巻序・丁付あり）。

各冊、巻首題・尾題・物語には挿絵を有する。

分冊状況・並びに巻首題等の詳細は以下の通り。

冊序	巻首題	尾題	版心題	丁付	挿絵
第一冊目	狭衣目録并年序	狭衣目録終	狭衣目	一～十三終	
	狭衣巻第一之上	狭衣巻第一之上終	狭衣一之上	一～五十二終	八枚
	狭衣巻第一之下	狭衣巻第一之下終	狭衣一之下	一～四十三終	四枚
第二冊目	狭衣巻第二之上	狭衣巻第二之上終	狭衣二之上	一～四十八終	四枚
	狭衣巻第二之下	狭衣巻第二之下終	狭衣二之下	一～六十終	六枚
第三冊目	狭衣巻第三之上	狭衣巻第三之上終	狭衣三之上	一～四十三終	三枚
	狭衣巻第三之中	狭衣巻第三之中終	狭衣三之中	一～四十八終	四枚
	狭衣巻第三之下	狭衣巻第三之下終	狭衣三之下終	一～五十終	四枚

第四冊目	狭衣巻第四之上	狭衣巻第四之上終	狭衣四之上	一～四十八終	四枚
	狭衣巻第四之中	狭衣巻第四之中終	狭衣四之中	一～五十三終	五枚
	狭衣巻第四之下	狭衣巻第四之下終	狭衣四之下	一～五十六終	六枚
第五冊目	狭衣下紐第一	狭衣下紐第一終	狭衣抄一	一～五十二終	
	狭衣下紐第二	狭衣下紐第二終	狭衣抄二	一～二十五終	
第六冊目	狭衣下紐第三	狭衣下紐第三終	狭衣抄三	一～二十六終	
	狭衣下紐第四	狭衣下紐第四終	狭衣抄四	一～十七終	
	狭衣系図	（ナシ）	狭衣系	一～十六	

第一冊目「目録并年序」奥に〈承応三年切臨署名〉、

第五冊目「下紐第一」冒頭に〈沙彌半醒序〉

第六冊目「下紐第四」奥に〈天正紹巴奥書〉

同「系図」奥に（系図は十六丁まで。その後に丁付無しの一丁を補い、そのオに）（承応三年切臨系図跋〉、ウに〈承応三年親信刊記〉がある。

旧蔵者印記「山岸文庫」（複郭朱長方印）「山岸」（単郭朱小型丸印）。